

創成期からみる錯綜する経営理論の一考察

—「栄養失調」な統合理論としての真髓¹—

土屋 翔

要 旨

今日、経営学という単語が物体－非物体、工業－農業という幅広い分野で使用されている。いっけん経営学は、いろんな分野に応用可能性があり、便利な学問といえる一方、独自の概念的枠組みを持たない学問という批判も受けるかもしれない。つまり、経営学は科学ではないという批判が現在も度々引き起こる。しかし経営学は、数字的な科学と人間的な“科学”との双方の性格を持ち合わせている。科学と“科学”は双方を拒絶するのではなく、互いを認めて相互支援のなか、相互に発展をする。常に経営学は科学と“科学”とのなかでテストし、蒸留させる必要がある。

経営学は、「栄養失調 (malnutrition)」な学問として多様な学問から、秩序ある借用、吸収をし、目的達成のための統合的、創造的枠組み化によって独自性を有する。複雑な環境を果敢にも把握しようとする学問であり、それこそ経営学として意義のあるおこないと思われる。

キーワード：経営学、「栄養失調」、統合、科学、時間軸

¹ 経営学が「栄養失調 (malnutrition)」という文章は以下を参照した。McFarland, D. (1986) *The Managerial Imperative: The Age of Macromanagement*, Ballinger Pub Co, USA, p. 25.

1 はじめに

今日、いたるところで経営学、経営、またはマネジメント（以下、便宜的に「経営学」でまとめる）という言葉を目にする²。たとえばランダムに例をあげると「経営学びつけ麺店切り盛り」「疾れトヨタ、外様が手綱、章男社長、『瀬戸際』突破へ抜てき、CASE時代、『変わる』決意」「健康経営」「経営はミカン畑で学んだ」『女性リーダーのための！感情マネジメントスキル』『環境マネジメント—地球環境時代を生きる哲学—』『経営サイバネティクス』『経営哲学の実践』『土地利用型農業の経営学』等、多様な記事、文献がある³。経営学というものが多様に使われ、広がりがあることが容易に理解できる。

上記を整理すると、経営学は物体—非物体、工業—農業という幅広い分野で使用されている。いっけん経営学は、いろんな分野に応用可能性があり、便利な学問といえる一方、独自の概念的枠組みを持たない学問という批判を受けるかもしれない。しかし、経営学は若い学問といわれながらも約一世紀に渡り、多様な研究がなされ今日に展開されている。今一度、経営学を見つめ直し、今日の経営学を吟味する必要がある⁴。経営学に留まらず、学問は常にテストされることが求められる。時代とともに変化する

² 厳密にいうと平田光弘がいうように「経営学の学」（経営学の学説研究）と「経営の学」（実践経営の理論・実証研究）に分けることができる。平田光弘 [2009]「平田光弘教授の略年譜、及び主要著作目録若かりし日々の回想」星城大学『研究紀要』(7)、86ページ。

³ 順に『日本経済新聞』2018年3月13日、4月2日、4月6日、4月8日。折戸裕子 [2018]『女性リーダーのための！感情マネジメントスキル』すばる舎。石井薫 [2003]『環境マネジメント—地球環境時代を生きる哲学—』創成社。H・フリック、鈴木幸毅ら訳 [1974]『経営サイバネティクス』白桃書房。経営哲学学会編 [2008]『経営哲学の実践』文眞堂。武部隆 [1993]『土地利用型農業の経営学』御茶の水書房。

⁴ 一度議論され常識になったことをもう一度議論することは、批判を受けるのかもしれない。しかし2018年9月5日から8日まで新潟国際情報大学で行われた日本経営学会第92回大会のサブテーマで「日本的経営とはなんだったのか？」が設定されている。現在の視点からもう一度過去を振り返る必要性がみてとれる。

視点からのテストにより経営学はより蒸留され発展していく。

2018年度、新潟国際情報大学では情報文化学部から経営情報学部といった学部編成により大きな転換期を迎えた。他の大学でも経営学系学部の新設が見受けられる。今日、経営学という学問が必要である証左と思われる。しかし、経営学といっても上記のように多様な展開がなされ、立ち位置によって議論が噛み合わないことも現実におきている。なぜ、経営学という学問内部で議論が錯綜するのかを検討することが必要である。

本稿では、経営学の議論が錯綜する要因を三つの要点から考察する。一つ目は科学と経営学との関係、二つ目は系譜的視点からの経営学考察、三つ目は分化と統合との対立、である。具体的の一つ目は、これまで多くの議論を起こした、経営学とは科学かを再度吟味する。歴史研究はその学問そのものであり、経営学を蒸留させ密度の濃い学問へと昇華させる⁵。二つ目は、経営学を系譜的に考察し本質を吟味する。大きな変化のなかで本質を考察することによって、経営学の源流を明らかにする。三つ目は、分化と統合とのなかで、経営学の性格を吟味する。経営学は統合理論として「栄養失調」と向き合う必要性について述べる。

以上から、錯綜する経営学の議論の手助け、整理になることを期待する。

2 科学と経営学

科学は、まず英語表記でscienceであり、語源を調べてみると、知ること、他から分離し一つにすること、切ること、裂くこと等の意味がある⁶。科

⁵ ゲーテ、J. W. V.山野直司訳 [2017] 『色彩論』 筑摩書房、104ページ参照。初版 [2001]。

⁶ 村上陽一郎は、系譜的にそもそも科学 = science という前提に疑問を持っている。今日の科学とよばれるものに自然現象のみを扱う学問であること、共通の方法論的関心を持つ領域の集まりであること、等をあげている。全ての学問が、これらの特徴をもっているとはいえず、全ての学問に科学という名が当てはまることはない。科学は、特徴を共有できない学問を非科学的と排除する傾向にある。排除することがscienceを自動的に科学と置き換えることができない所以であると村上という。詳細は、村上陽一郎 [1994] 『文明のなかの科学』 青土社、11-8ページ参照。

学は、対象を知ろうとすることから始まり、知るために大きな環境から対象を切り取る作業が必要といえる。したがって、全体から知る対象を分類することが科学の出発点と思われる。池田清彦（以下「池田」と略記）は、分類することは思想を構築することであり、分類を基に現象を説明しようとする営為が科学であると述べている⁷。

つぎに池田がいう「説明しよう」とする行為は、説明をする前に対象を知ることが求められる。必然的に、対象を他から分離させ、説明主体が知ることが可能な範囲内に収める必要がある。全体と部分という用語を使うと、対象を全体から切り離し部分にする。なぜ部分化する作業が行われるかということ、科学主体である人間の限界性に起因する。例えば、Barnard, C. I.とSimon, H. A.は以下のように人間の限界性を述べている⁸。

Barnard, C. I.（以下「Barnard」と略記）は、物的環境に適応する際に人間の生物的制約（biological limitations）を三つあげている。1) 人間のエネルギーを環境に適応することについての制約、2) 知覚についての制約、3) 環境を理解し、あるいは環境に反応することについての制約、の三つから人間の限界性を述べている。

Simon, H. A.（以下「Simon」と略記）は、人間の行動は「合理性の限界（the limits of rationality）」があるため客観的合理性に三つの点で及ばないという。1) 合理性は、各選択に続いて起こる諸結果についての完全な知識と予測を必要する一方で実際には、結果の知識はつねに断片的なものであること、2) これらの諸結果は将来のことであるため、それらの諸結果と価値を結びつける際に想像によって経験的な感覚の不足を補わなけれ

⁷ 池田清彦 [1992]『分類という思想』新潮社、8、54ページを参照。

⁸ Barnard, C. I. (1938) *The Functions of the Executive* Thirtieth Anniversary Edition, Harvard University Press, USA, p. 27. 〈山本安次郎、田杉競、飯野春樹訳 [2013]『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、28ページ。〉 Simon, H. A. (1997) *Administrative Behavior: A Study of Decision Making Processes in Administrative Organizations*, The Free Press, USA, pp. 93-4. 〈二村敏子、桑田耕太郎、高尾義明、西脇暢子、高柳美香訳 [2009]『新版 経営行動—経営組織における意思決定過程の研究—』ダイヤモンド社、145ページ。〉

ばならないこととともに、価値は不完全にしか予測できないこと、3) 合理性は、起こりうる代替的行動の全ての中から選択することを要求し、実際の行動ではこれらの可能な代替的行動のうち、ほんの二、三の行動のみしか心に浮かばないこと、である。

両者とも、対象である環境に対し主体能力の限界性を説いている。自然科学、社会科学問わず、研究者は対象を定めて研究を行う。したがって、研究主体の限界性からは逃れることはほぼ不可能といえる。つまり、語源から考察した「他から分離し一つにすること」という科学自体が、主体の限界性を前提にしている。

また科学の対象は、主体の限界性とは別に絶えず変化している。主体が研究をしようと他から分離させ一つにした場合、分離させる前の対象とは大いに異なる可能性がある。福岡伸一は「世界は分けられないことにはわからない。しかし、世界は分けてもわからない」と述べている⁹。前文は、主体の限界性により対象になるものを切り取る必要があることを示している。後文は、二つの理由がある。一つは主体の限界性で、もう一つは対象そのものの「動的平衡」である¹⁰。

「動的平衡」を端的にいうと世界、環境は絶えず変化しながら平衡を保っているということができる。鴨長明が「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、またかくのごとし」いうように、同じように見えても時間軸で捉えると構成が同じものなどない¹¹。しかし、研究をする際には一時的に時間を止める必要がある¹²。本来、動いている対象を研究するために一時的に止めるということは、対象そのものを歪めてしまう恐れがある¹³。

そして上記が、おおよその科学に限界があるといわれる所以であると思

⁹ 福岡伸一 [2012] 『動的平衡2』 木楽舎、119ページ。

¹⁰ 福岡伸一 [2012] 前掲書、[2009] 『動的平衡』、[2014] 『動的平衡ダイアログ』、[2017] 『動的平衡3』。

¹¹ 鴨長明、築瀬一雄訳注 [2015] 『方丈記』 KADOKAWA、15ページ。

¹² 福岡伸一 [2014] 前掲書、40ページ参照。

われる。たとえ科学が万能であったとしても、科学主体である人間に限界がある以上、科学にも自ずと限界が設定されてしまう。一般的に“わかりやすい”というものは、対象を限りなく分離させ範囲を狭めている。したがって、本来のすがたとはかけ離れ、無理やり認識しやすくしている。世界は分断できるものでなく全ては繋がっている「tangle world」である¹⁴。科学が、真実を知ろうと全体から部分を切り離したらそれは真実ではない。そもそも世界は繰り返すように「部分として切り出せるものもない」と考えられる¹⁵。

上記のように、科学が真実を知ろうとする作業ならば、科学でわかることは時間を止めた枠内のごく一部ということになる。無論、ごく一部では真実には遠く、より多くの材料を必要とする。つまり、基礎科学を集め統合し、応用科学として考察する必要があるかもしれない。結局人間は、真実へ向かう科学のピースをゆっくり一つずつ集めることしかできない。しかし、それでも真実に繋がる可能性が上がるかもわからない。

さらに酒井邦嘉は、科学の知識を大きく二つに分けている¹⁶。数学の公理に代表される経験による根拠を必要としないアприオリな知識と反証可能性を有する経験による根拠を必要とするアポステリオリな知識である。端的に理論と実践との知識に分けられる。二つの知識は、それぞれ独立し

¹³ 福岡伸一 [2014] 前掲書、119ページ参照。他にも「次の瞬間に目を移すことができれば、原因と結果は逆転しているだろう。あるいは、また別の平衡を求めて動いている。つまり、この世界には本当の意味での因果関係と呼ぶべきものは存在しない」と述べている。

¹⁴ Hernes, T. (2008) *Understanding organization as process: theory for a tangle world*, Routledge, USA, Canada, pp. 1-17.

¹⁵ 福岡伸一 [2017] 前掲書、170ページ。

¹⁶ 酒井邦嘉 [2006] 『科学者という仕事』中公新書、24-5ページ。酒井は「研究者にとって特に大切なのは、『考えること』である。そのためには、考えるための物理的な時間だけでなく、精神的な『飢餓感』が必要になる。これは、現状に安住することを嫌い、常に新しいアイデアを渴望するような『ハングリー精神』である。」と述べている。酒井邦嘉 [2006] 前掲書、131ページ。筆者の副題にある「栄養失調」と通ずるものがある。

て発展をしてきたことも認めながらも、完全に分離することはできず、双方が援護射撃をし発展してきた。重要な点は、科学と一言でいっても、根底である知識は大きく二つに分けることができ、それぞれの発展を認めることと思われる。

Popper, K. R. (以下「Popper」と略記)は、経験科学に属する言明を疑似科学的、前科学的、形而上学的、数学的論理的、言明から区別する基準は、反証可能性 (falsifiability) があるかどうかという¹⁷。反証可能性は「言明および言明集合の論理的構造にのみ関わることであり、ある生じうる実験結果が反証として受け容れられるだろうかどうかの問題とはなんの関わりもない」という¹⁸。反証可能な場合は、対象である言明や理論に潜在的な反証子 (potential falsifier) という基礎言明 (basic statement) が存在する時である¹⁹。したがって、Popperは経験科学が科学である所以は反証可能性であり、揺るぎのない答えが必ず一つ存在することはないことを暗示している。

Kuhn, T. S. (以下「Kuhn」と略記)は科学革命を「ただ累積的に発展するのではなくて、古いパラダイム (paradigm) がそれと両立しない新しいものによって、完全に、あるいは部分的に置き換えられる、という現象である」と述べている²⁰。以上は、一般的にパラダイム理論とよばれて

¹⁷ Popper, K. R. (2005) *Realism and the Aim of Science*, Routledge, UK, USA, p. xx. 〈小河原誠、蔭山泰之、篠崎研二訳 [2002] 『实在論と科学の目的 (上)』岩波書店、xxv-xxvi。〉

¹⁸ Popper, K. R. (2005) op. cit., p. xx. (小河原誠、蔭山泰之、篠崎研二訳 [2002] 前掲書、xxvi。)

¹⁹ 「基礎言明とは、観察されることが論理的にいつて可能であるような論理的な可能事を記述する言明であるというようにしなければならない。」この時に、対象である基礎言明に対し真を要求しないことが求められる。Popper, K. R. (2005) op. cit., xx. 〈小河原誠、蔭山泰之、篠崎研二訳 [2002] 前掲書、xxvi。〉

²⁰ Kuhn, T.S. (1996) *The Structure of Scientific Revolutions 3rd ed*, University Press, USA, p. 92. 〈中山茂 [1980] 『科学革命の構造』みすず書房、104ページ。初版 [1971]〉翻訳本である『科学革命の構造』は度々誤訳であると批判される。しかし、本稿では中山を尊重してそのまま引用する。

いる。一時的な科学による答えはあるとしても、時間軸で科学を捉えた場合、恒久的な一つの答えは存在しない可能性が高い。科学というのは、置き換わる可能性があり、答えは一つではないことを述べている。

Lakatos, I. (以下「Lakatos」と略記)は、PopperとKuhnとを参考にしつつも批判し研究プログラム(research programme)という概念を論じた。研究プログラムは「堅い核(hard core)」と「防御帯(protective belt)」で構成されている。「堅い核」は広大な「防御帯」である「補助仮説(auxiliary hypotheses)」により「どんなことがあっても反証からは保護されることになっている。さらに重要なことは、研究プログラムそれ自体も『発見法(heuristic)』つまり強力な問題解決機構をもっていることである。この機構は、高度な数学技術の助けを借りながら、変則事例をうまく消化し場合によってはそれを支持する証拠に変えてしまう」という²¹。

Lakatos理論は、科学者が厚顔(thick skins)で驚くべきしたたかさ(remarkable tenacity)があることつまり、人間性を考慮している²²。科学者は自身の「堅い核」を守るため「防御帯」を多用する。自身の理論が事実と相違があったとしても「堅い核」である理論の修正をおこなわず「防御帯」で対処をする。したがって、Lakatos理論においても唯一の答えはないことが伺える。唯一の答えを守るために多様な「補助仮説」に頼るしなく「補助仮説」の力を借りる時点で唯一の答えとは言い難い。

以上のように、多様な論者をあげ、科学のほんの一側面を端的に述べた。時間軸を加味した場合、科学が多様に変化する可能性は否定できない。そ

²¹ Lakatos, I., Worrall, J. and Currie, G. (Eds.) (2001) *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Cambridge University Press, UK, pp. 5-6. (村上陽一郎、井山弘幸、小林傳司、横山輝雄 [1986]『方法の擁護—科学的研究プログラムの方法論』新曜社、8ページ。)しかし、堀越比呂志は、「堅い核」を保持することまたは、設定することに疑問を感じている。場合によっては「堅い核」自体も変更する場合もある。ポパー哲学研究会編 [2001]『批判的合理主義-第1巻:基本的諸問題』未来社、144-54ページ。

²² Lakatos, I. (2001) op. cit., p. 4. (村上陽一郎、井山弘幸、小林傳司、横山輝雄 [1986]前掲書、6ページ。)

の時々状態に応じて主体が理解しやすいように加工され一時的な解を求めてしまう。したがって、恒久的ではない。つまり科学が、正しいと認識される所以は、常にテストを受け、そのテストに合格し続けることである。

くわえて一言で科学といっても、自然科学、社会科学があり、それぞれ研究手法も異なる。無論、経営学は社会科学に属し、自然科学からの視点だけで経営学を判断することはできない。以下では、より焦点を絞って科学と経営学との関係を詳細に考察していく。

まず桜井邦朋（以下「桜井」と略記）は、科学における自然科学と社会科学とを比較しながら痛烈な批判を社会科学に向ける。桜井は、文化系や社会系の講義は、知識を教え込むことに終始していると批判する。他にも「権威やイデオロギーが、かなり強く学問的立場まで支配してしまう傾向が、人文科学や社会科学の分野では、よく見受けられる」という²³。さらに科学は、答えが一つであり多様な見解を許さず、研究機関や学者個人などにより見解が異なる社会科学は、科学ではないという。「学問が個人のレベルにまで下がってきてしまったのでは、その健全な発展など到底望むべくもない」と批判の熱は高まる一方である²⁴。

つぎに経営学は、周知の通り社会科学に分類される。上記のように科学は、全体から部分を切り取り本来のものとはかけ離れたかたちで観察をする。したがって、科学でみたものは本来のすがたと異なる可能性がある。つまり、実践としての側面もある経営学は全体から部分を切り取ったものをみるという学問に終始していいのかという疑問が残る。もちろん、上記

²³ 桜井邦朋 [1991]『大学教授 そのあまりに日本的な』地人書館、46ページ。福岡伸一はSTAP細胞に関して「そもそも日本のメディアが連日報道したのは、発見者の小保方晴子さんが若い理系女子だったからだが、なんといっても最も権威のある科学専門誌『ネイチャー』に二つの関連論文が同時に掲載されたこと—つまり厳しい審査を経ているはずだということ、そして共著者に理化学研究所—日本を代表する再生医療研究のメッカの錚々たるメンバー、およびハーバード大学医学部—いわずと知れた世界最高峰の研究機関の有名教授陣が名前を連ねていたという事実も、発見の信頼性に多大な後光効果をもたらしていたことは確かだった」と述べている。福岡伸一 [2017] 前掲書、54ページ。自然科学も社会科学もおおよそ変わらない。

²⁴ 桜井邦朋 [1991] 前掲書、47-8ページ。

のように主体の限界があるが故に、自ずと部分的になることは加味する必要がある。しかし、全体を認識しより全体に近づこうと部分の関係性から出発することと、部分が全体と思い込んで満足することとでは学問の発展上、大いに意味が異なる。筆者は、前者を支持するとともに、前者が経営学という学問の性格の一つと考えている²⁵。

経営学に関する部分と全体との議論に関するもう一つのヒントは、経営学の主体にあると思われる。まず三戸公（以下「三戸」と略記）は「日本における経営学の貢献と反省—21世紀を見据えて—」において、経営学の反省はつまるところ、個人に行きつくという²⁶。したがって、個人主体の限界に依存する。上記のように、個人には限界がある。経営学で真実をみるためには、多様な理論を重ねてより複合的視点で現実をみようと試みる統合理論にする必要がある²⁷。

また、経営学を包摂する部分もある社会学も科学なのかという議論がなされてきた。ギデンズ, A. (以下「ギデンズ」と略記)は「社会学は科学か」という問いは以下の二つの意味が含有しているという²⁸。第一に「社会学は自然科学の研究手順を厳密に手本としうるのか」、第二に「自然科学者が物質世界に関して展開してきたのと同じ種類の、正確な、事実 に立脚した知識を獲得することを、社会学に期待できるのか」である。結論をいうとギデンズは、上記の二つを社会学は満たすことが可能であり、社会学は

²⁵ より専門的な言葉でいうと、方法論的個人主義と方法論的全体主義ということができる。しかし、筆者は中條秀治がいう「方法論的關係主義」を支持する。中條秀治 [2000] 『組織の概念』文眞堂、33-58ページ。

²⁶ 三戸公 [2013] 「日本における経営学の貢献と反省—21世紀を見据えて—」経営学学会編『経営学の貢献と反省—二十一世紀を見据えて—』文眞堂、7ページ参照。

²⁷ 福岡伸一は「その断片を集め、重ね合わせることによって、あるいは隙間なく繋ぎ直すことによって、そして、そのあいだを想像力によって埋めることによって、かつてそこにあったはずの生命の時間をわずかでも取り戻そうとしているのである」と述べている。[2017] 前掲書、162ページ。

²⁸ ギデンズ, A. 松尾精文、成富正信、西岡八郎、藤井達也、小幡正敏、叶堂陸三、立松隆介、松川昭子、内田健記 [1995] 『社会学 (改訂新版)』初版 [1992]、而立書房、25ページ。

科学であるという。

しかし、ギデنزは「人間を対象とする研究は、物質的世界の出来事の観察とは異なり、社会学の論理的枠組みにしても知見にしても、たんに自然科学になぞられるだけでは適切に理解していくことはできないのである」という²⁹。社会活動に従事する「有意味」な活動を問題にし、必ずしも自然科学で測定することはできない。つまり、人間を観察する場合、自然科学のみでおこなう限界性を説き、社会科学で観察する必要性を説いている。したがって、自然科学と社会科学とを同一基準で測定することは困難と思われる。

ギデنزと同様な視点で Magretta, J. (以下「Magretta」と略記)は、経営学を学ぶ者は「世界を『数字と人間 (numbers and people)』というふたつの領域に分けて見る傾向がある」と述べている³⁰。Magrettaは、経営学において難しいことは「数字と人間」を全体機能として捉えることであり、個々の部分最適化ではないという。したがって、経営学における議論の錯綜は、経営学内部にある「数字と人間」の部分を個々に考察し分化させている可能性がある。つまり、数字の部分は科学的とされ、人間の部分は科学的ではないとされる。Magrettaがいうように、経営学の重要な点は両者を全体的に考察することである。この点でいうと経営学は、科学的であり科学的でない双方の側面を持っている。

そして Simon もギデنزと Magretta と同視点である。第一に Simon は科学には理論的なもの (theoretical) と実践的なもの (practical) と二種類に分類している³¹。第二に科学は「われわれが利潤を最大化すべきか否かを語ることはできない。科学は単に、どのような条件のもとでこの最大

²⁹ 注28と同。

³⁰ Magretta, J. (2013) *What Management Is: how it works and why it's everyone's business*, Profile Books, Great Britain, pp. 194-5. (山内あゆ子訳 [2003] 『なぜマネジメントなのか—全組織人に必要な「マネジメント力」—』ソフトバンクパブリッシング株式会社、299ページ。)

³¹ Simon, H. A. (1997) op. cit., pp. 356-7. (二村敏子、桑田耕太郎、高尾義明、西脇暢子、高柳美香訳 [2009] 前掲書、549-51ページ。)

化が起こり、また最大化の結果がどうなるであろうかを語るだけである」と述べている。つまり、倫理的 (ethical) なことは科学ではなく、事実に (factual) なことは科学とされる。第三に、自然科学と社会科学との差異は「知識、記憶および期待によってその行動が影響される意識的な人間 (human) を扱う」ことにある。この記述は上記の Magretta と同様であろう。

さらに Mintzberg, H. (以下「Mintzberg」と略記) は、経営学は科学でも専門技術でもないと言断する³²。Mintzberg は「サイエンス (science) の目的は、研究を通じて体系的な知識を獲得すること。これはマネジメントの目指すものとはまるで違う。マネジメントの目的は、組織でものごとを成し遂げる後押しをすること」といい、目的そのものが異なることを強調している³³。もちろん、経営学にサイエンスが必要ではないということではなく、アート (art)、サイエンス、クラフト (craft) で考察する必要がある。

Mintzberg は、経営学に「唯一最善の方法 (one best way)」はないという。何が正解かは、その時々が変わる。経営学は、時間軸で考察することが必要であり「動的平衡」のなかで考察することが必要がある。

図2-1のように、Mintzberg がいうことを前提に置かなければ、経営学がみえてこない。これまでの経営学への批判は、サイエンスとしての部分的な批判が多かったと思われる。サイエンス視点で経営学を考察した場合、図2-2の広い - (空間) - 狭い、過去 - (時間) - 未来、基礎 - (理論) - 応用の三軸で考察することができる。経営学は、理論軸でいうと応用理論に属し、何を対象にするかによって空間軸、時間軸に変更がある。つまり、応用理論としての経営学は、空間軸と時間軸との設定により答えが多様に変化する可能性が高い。

³² Mintzberg, H. (2013) *Simply Managing: What Managers Do and Can Do Better*, Berrett-Koehler Publishers, USA, pp. 8-11. (池村千秋訳 [2014] 『エッセンシャル版 ミンツバーグ マネージャー論』日経BP社、13-7ページ。)

³³ Mintzberg, H. (2013) op. cit., p. 8. (池村千秋訳 [2014] 『エッセンシャル版 ミンツバーグ マネージャー論』日経BP社、13ページ。)

たとえば、2人の組織体は空間軸でいうと“狭”に分類され20万人の組織体は相対的に“広”に分類される³⁴。両者の管理方法が同一であるとは考えにくく、それぞれ異なった管理方法が必要である。時間軸で考えてみ

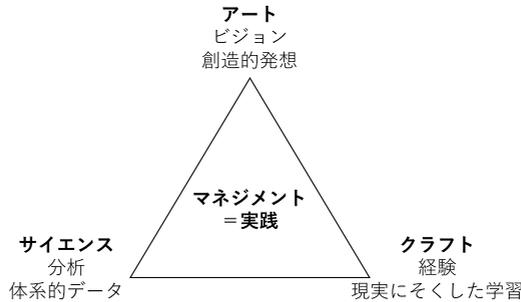


図2-1 Mintzbergにおける経営学の問題

(出所) Mintzberg, H. (2013) *Simply Managing: What Managers Do and Can Do Better*, Berrett-Koehler Publishers, USA, p. 9. (池村千秋訳 [2014] 『エッセンシャル版 ミンツバーク マネージャー論』日経BP社、15ページ。)

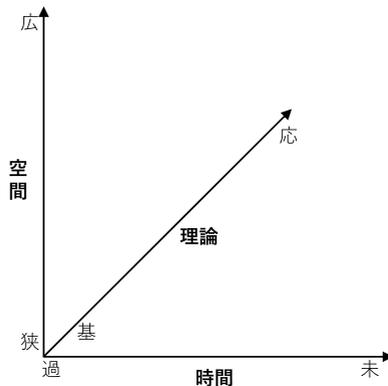


図2-2 サイエンスとしての経営学構造

³⁴ 図2-2は相対的に違いを見るために用いる。つまり経営学を分類し計る尺度ではない。20万人と200万人との相対的比較では、20万人は“狭”、200万人は“広”になる。この時、双方に対する経営学は異なる可能性が高い。例えば、コーポレート・ガバナンスは大企業を対象にしていることからわかる。

ると、経営学史のように“過”を対象にする場合もあれば、経営戦略のように“過”を踏襲しながらも“未”へとこれまでの方法論が通用しない未知なる範囲を対象にする場合もある。無論、時代により経営学に要求する役割は変化してきた。したがって、上記のように時間軸で経営学をみると多様な回答を発見することが容易になる。

経営学は、経営体の目的に応じて、経済、教育、軍事、医療等の学問的成果を包括し、哲学、心理学、社会学が前提的な学問になった応用科学といえる³⁵。経営学は、他の学問から一つ一つの答えを集め、経営学として統合して一つの答えをだす。仮に、科学が恒久的な唯一最善の答えのみにこだわるならば、経営学は科学という名を自ら捨てる覚悟が必要である。しかし、科学そのものに唯一最善の答えはない。つまるところ、それぞれの定義の問題（a matter of definition）にいきつく³⁶。

さいごに、科学と経営学との関係をまとめる。経営学を科学視点でみた場合、大きく二つの観察の仕方がある。科学と“科学”である。上記を興味すると表2-1で整理することができる。

表2-1 本稿のキーワードにおける科学と“科学”の大まかな分類

科 学	“科 学”
基 礎 科 学	応 用 科 学
ア プ リ オ リ な 知 識	ア ポ ス テ リ オ リ な 知 識
数 学 的 論 理 学	経 験 科 学
自 然 科 学	社 会 科 学
数 字	人 間
事 実 的	倫 理 的

※わかりやすく二項対立で分けており、厳密性は求めている。この表の意味は、経営学が双方を包摂、または部分的に統合していることである。

³⁵ 三戸公 [2013] 前掲論文、18ページ参照。

³⁶ Hernes, T. (2008) op. cit., p. xiv.

表2-1のように一言で科学といっても科学の幅が広く的確に対象を表すことが困難だと思われる。表2-1のように経営学は科学の部分と“科学”の部分双方がある。したがって科学という部分視点から“科学”部分をみた場合、経営学は科学ではないとされる。科学と“科学”とのあいだには、共約不可能性 (incommensurability) があり、環境、条件が異なる場合、それぞれの尺度で他方をはかることはできない³⁷。つまり、経営学を批判する場合は経営学の科学領域の中で科学視点から行う必要がある。また“科学”領域の中で“科学”視点から批判を行う必要がある。以上の点から、経営学は科学であり、“科学”でもあるということがわかる。

3 創成期からみる経営学の分化と統合

日本経営学は、多分にアメリカとドイツとの影響を受けてきた。一般的に日本経営学が「骨はドイツ、肉はアメリカ」といわれることから容易に理解できる³⁸。したがって今日でも日本経営学が、アメリカの management に該当するのか、ドイツの経営経済学に該当するのか、つまり訳すことができるのかという議論がある。日本は、学問を輸入、翻訳し基礎としながらも独自に発展させてきた歴史がある。つまり日本経営学は、ドイツ語、英語その他多くの国に訳すことが困難である。その逆も然りである。部分視点ではなく全体視点でみると、日本経営学は日本の水、空気、食べ物で発展した固有の学問といえる。

まず日本経営学の系譜を述べるにあたり、上田貞次郎（以下「上田」と略記）を外すことはできない。なぜならば上田は「日本における経営学の発達を、はじめて体系的に叙述した」からである³⁹。1907年の「内池廉吉君書『商業学概論』を評す」では、商業学は個別的な取引を扱うのではなく、より全体的、広く研究する必要性を説き、今日の日本経営学の基礎概

³⁷ Kuhn, T.S. (1996) op. cit., pp. 198-204. 〈中山茂 [1980] 前掲書、227-35ページ。〉

³⁸ 増地庸治郎 [1939] 『経営学講話』高陽書院、2ページ。

³⁹ 坂本藤良 [1959] 『経営学史』ダイヤモンド社、247ページ。

念に触れている⁴⁰。この頃、商業学が中心であり経営学も実学として商業経営を想定していた。しかし、工業も含める必要があるとして「商工経営」、その後工業、農業を含める「商事経営」とより包括的な概念を提唱し、部分的な理論からより全体的であり統合理論としての経営学を位置付けた。

より詳細に述べていく前に、上田が目指した経営学の科学化を上記の「科学と経営学」に照らし合わせて端的に述べる。日本経営学生誕の前は、商業学が中心であった。当時の商業学は「経済学、経済史、経済政策、民法、商法、破産法、行政法、国際法などの一部より借り来たる知識を従来の商事要項に加えたものにすぎ」ず、分化が目立っていた⁴¹。この点でいうと、商業学も経営学と同様に「栄養失調」状態であったことが伺える。上田が目指したことは、上記のような「複数の商業学」を「単数の商業学」にし部分的なものを統合させ、技術的な簿記等を科学化から除外することであった。吉田和夫は、簿記の除外はドイツで見られることがなく、この点が上田経営学の特色と述べている⁴²。

上田が目指した科学化は、複数を細分化し単数にするという単純な部分化ではないと思われる。複数の要素に経営学として秩序を持たせ単数として扱うことつまり、部分の統合による統合的単純化である。したがって、多様な学問を日本経営学として秩序化、統合することを目指した。しかし、今日の日本経営学をみると、アメリカ経営学の影響を多分に受けmanagement、marketing、accountingのように分化される傾向が強い⁴³。今後、日本経営学は経営学という秩序の基に柔軟に分化、統合を繰り返し発展し、吟味するとともにこれまでの系譜をしっかりと考慮に入れる必要がある。

つぎに上田は「蓋在来の商業学は個々の商取引の実務手続に関する研究をなすが故に手代事務員の執掌すべき日常の細務を執り又は其執務の組織

⁴⁰ 上田貞次郎 [1907] 「内池廉吉君書『商業学概論』を評す」『経済学商業学国民経済雑誌』2(6)、804ページ。文字は、ある程度現代使いに直している。

⁴¹ 吉田和夫 [1992] 『日本の経営学』同文館、20ページ。

⁴² 吉田和夫 [1992] 前掲書、21ページ。

⁴³ 吉田和夫 [1992] 前掲書、58-9ページ。

を案出するの準備となれども、企業者として事業経営の大本を塩梅する所の頭脳を訓練するに適せず。又経済学及経済政策は商業が国民経済組織の裏に活動する有様を論じ、且国家が如何にして其害を防ぎ其利を進むべきかの問題を解釈するものなれば商工業者に取りて頗る有益なる知識を供給するには相違なけれども、商工業其者の内部の経営施設に対しては直接の関係を有するにあらず。一言にして之を蔽へば経済学の広大なると商業実務の精細なるとの間に在て両者の連絡を保つ所の或者を要す。比或者は即ち起業家の立場より私経済の利害を標準として商工業の経営法を論ずる所のものなるを要す」と述べている⁴⁴。

上田によると、商事経営学は企業家の立場から主体的に経営法を論じ、私企業の利害が標準とされることである。坂本藤吉（以下「坂本」と略記）は上記に関して、前者に関して商業学ではありえず経営学という必要があること、後者に関して商事経営学は経営学であり、経営経済学とはっきりと区別する必要があること、を述べている⁴⁵。坂本に従うと、日本経営学とドイツ経営経済学は異なり、しっかりと区別し独自の系譜を追う必要がある。

より詳細に述べていくと、上田は経営を「生産営利其他の経済上の目的の為に人と物、労力と財とを有効に配合する所の其技術上の組織」という⁴⁶。「生産営利其他の経済上の目的」はおおよそ「経済の原則」に従う。「経済の原則」とは「最少の費用を以て最大の効果を得る」ことである⁴⁷。したがって経営は、目的達成のために諸要素を「最少の費用を以て最大の

⁴⁴ 上田貞次郎 [1909]「商事経営学とは何ぞや」『経済学商業学国民経済雑誌』7(1)、3ページ。文字は、ある程度現代使いに直している。

⁴⁵ 坂本藤吉 [1959] 前掲書、273ページ。

⁴⁶ 上田正一 [1975]「経営」『上田貞次郎全集 第一巻 経営経済学』第三出版、325ページ。上田正一は著作権者。編集委員代表は、猪谷善一、山中篤太郎、小田橋貞寿。「はじめに」で述べたように「経営の学」と「経営学の学」とは異なる。しかし、経営から経営学が生まれ、経営学からまた経営が生まれるという相互支援を否定することはできない。したがって、本稿では経営と経営学との違いはさほど重要ではなく、経営学の生成にあたる諸概念を述べている。

⁴⁷ 上田正一 [1975]「経営経済学」前掲書、29ページ。

効果を得る」ように配合することといえる。上記の「経済の原則」は商業、工業に留まらず、農業ひいては組合組織にも共通の概念である。ここに経営学の一つの基礎概念を垣間みることができる。

図3-1をみると、経営学の概念が広いことがわかる。「営利と非営利との目的を離れた経営そのものの問題は同一」であり、本質的に経営学は組織体に使用することができる⁴⁸。営利企業は、営利を追求する。非営利企業例えば、協同組合は組合員の目的を追求できれば本質的に収支はゼロでも問題はない。異なる企業体も本質的に「最少の費用を以って最大の効果を得る」は、同一の原則と考えることができる。

また、増地庸治郎（以下「増地」と略記）をあげる。なぜならば、増地は上田と並び、ドイツ流の経営経済学を輸入して、日本経営学を風靡したからである⁴⁹。増地によると、ドイツでは当初「商業経営学 (Handelsbetriebslehre)」と呼ばれていた⁵⁰。工業が発展し「商業経営学」で対応が困難になり、工業、商業を包摂する「私経済学 (Privatwirtschaftslehre)」が1911年頃に誕生した。「私経済学」は大きく分けて二つに意味を有している。第一は、生産経済と消費経済とを合わせたものである。第二は、公共団体に対する

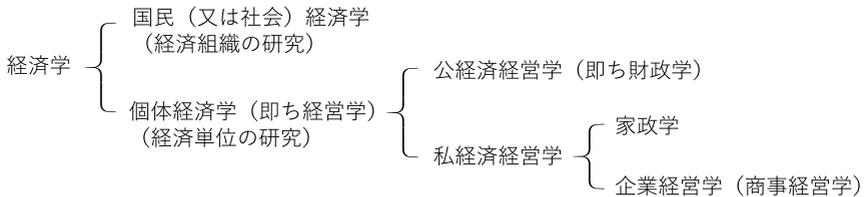


図3-1 経営学における理論上の整理

（出所）上田正一 [1975]「商事経営学とは何ぞや」『上田貞次郎全集 第一巻 経営経済学』第三出版、387ページ。上田正一は著作権者。編集委員代表は、猪谷善一、山中篤太郎、小田橋貞寿。

⁴⁸ 上田正一 [1975] 前掲書、28ページ。

⁴⁹ 馬場誠 [1948]「増地博士の経営学と我国産業の再建—『新しき経営学』の行き方—」『増地庸治郎博士記念論文集 第1巻』巖松堂書店、5ページ。

⁵⁰ 増地庸治郎 [1939]『経営要論』巖松堂書店、4-6ページ。

私人経済である。「私経済学」は営利経済学と解される可能性と公に対する私という範囲の狭さから限界が問われた。「私経済学」が不相当とされ1919年頃に「経営経済学 (Betriebswirtschaftslehre)」という名称になったとされている。したがって、ドイツ経営学の影響を多分に受けている日本経営学も、ドイツ経営学と同様により広い範囲を包摂しようと統合し発展をしてきたといえる。具体的には、上記で述べた上田の「商工経営」がある。

第一に増地は、経営経済に関して三つの観点から述べている⁵¹。一つ目は「経営経済は一個の単独経済（個別経済）(Einzelwirtschaft)」である。単独ということは、統一意思を前提とし主体的である。二つ目は「経営経済は生産経済 (Produktionswirtschaft)」である。生産上で単独経済を構成する人々の欲望を充足する目的をもつ。三つ目は「経営経済は経済性 (Wirtschaftlichkeit) を目標とする」ことである。当時は、協同組合の活動も活発になっており、営利目的をあげることは適切ではなかった。したがって、経済原則という「共通的特質」をあげるようになった。まとめると、増地によると経済性を目標にし、統一意思の主体的な生産経済が経営経済である。

第二に増地は「経営経済学は単独経済的観察を任務とする科学」と述べている⁵²。国民経済は総合経済の構成分子という立場から、国民経済である単独経済活動を観察する。したがって、全体の立場から部分の活動を観察するものといえる。しかし、全体から部分を観察するには限界があるため、部分から全体、部分から部分といった観察も経営経済学に必要な。まとめると経営経済学は、経済性の立場から生産経済を対象にして因果関係を明らかにし、理論体系を樹立させることを目的にする。したがって、経営経済学は経営経済における諸内容を説明し、理論体系を構築することといえる。

⁵¹ 増地庸治郎 [1939] 前掲書、13-5ページ。

⁵² 増地庸治郎 [1939] 前掲書、15-6ページ。

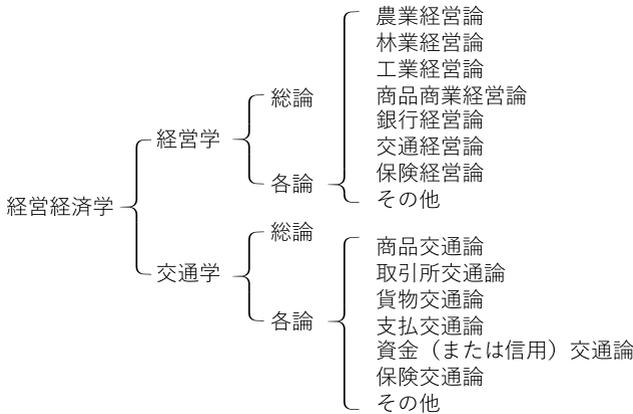


図3-2 経営経済学の体系

(出所) 増地庸治郎 [1939] 『経営要論』 巖松堂書店、17ページ。

経営経済学の体系は、増地によると経営学 (Betriebslehre) と交通学 (Verkehrslehre) とに二分される。前者は経営経済内部を対象にし、後者は経営経済外部の対外問題を対象にしている。今日の日本経営学を図3-2の経営経済学の体系に当てはめると、経営学の部分に該当し、商学は交通学の部分に該当すると思われる。しかし、今日の状態をしてみると経営学と商学に相互のオーバーラップが見受けられる。例えば、大学では経営学部で商学の内容、商学部で経営学の内容を教えていることも多い。つまり、日本では明確な区分がなされていない証左であり、自ずと学問の範囲が広がっているまたは範囲が曖昧のまま放置されている可能性が高い。

そして平井泰太郎 (以下「平井」と略記) は、経営学と商学との区分は考察する視点の相違にあるという。前者は「資本および労務の提供ならびに危険負担を中心とする考察」であり、後者は「物資の配給、ならびにこれに伴う金融を中心とする考察」である⁵³。詳細を述べると、前者は物資配給を前提とした市場活動において個々の単位からの出発を中心にし、後者は商活動であり物資の取り扱い、取引方法の解明を中心にする。おおよ

⁵³ 平井泰太郎 [1972] 『平井泰太郎経営学論集』 千倉書房、29ページ。

そ、経営学と商学とは同一物を異なる視点でみるが故に混交を生じることは多々ある。

さらに平井は、経営学と経営とに関し以下のように述べている。「経営的見方」は「経営の全過程を主体的統一過程としてみるのである。換言すれば、経営を単に経済として客観的・巨視的に外観するだけではなく、さらに進んではそのなかにはいり、これを内から目的あり、計画ある営みとして、その諸活動、諸関係の意味を内観し、しかも計画的に内外を統一し、経営の維持発展をはかる作用としてどこまでも主体的にみ、行為的・形成的にみるのである」と述べている⁵⁴。以上に関し、平井は経営を経営に即して経営的にみる認識体系が経営学と述べている。つまり、上田のいうように「経営学の起源は従来の商業学を如何にして学問的に整理するかといふ問題」であり、主体的に経営学視点から秩序立てることといえる⁵⁵。

ほかにも「経営学的見方の特色は経営過程や経営関係の主体的統一過程の把握にあり、そこには『主体の論理』が根底にあり、分析によりは総合ないし統一に重点のあることが理解され」と述べている⁵⁶。「主体の論理」は、科学主体の限界と同様なことがいえる。つまり、主体の認識範囲に限定されることを意味する。しかし、繰り返すように主体認識として秩序立てる必要がある。

さいごに以上の系譜に関し、2017年の小笠原英司（以下「小笠原」と略記）の論文から二点取り上げたい。第一に経営学の独自性は「企業組織体に限らず『経営体』という事業組織体を対象とする点にこそ」あることと第二に「経営学は経営体の構造面を単に外観的に記述するばかりではなく、経営体そのものを行動主体と見なした上でその機能面と変容の過程を内観的に解釈しようとする」ことである⁵⁷。前者は、経営学の対象が経営体であることに関して上田と同様であるし、後者の内観的に解釈すること

⁵⁴ 平井泰太郎 [1965] 『経営学』 青林書院新社、60ページ。

⁵⁵ 上田貞次郎 [1931] 『商工経営』 千倉書房、7ページ。初版 [1930]

⁵⁶ 平井泰太郎 [1965] 前掲書、61ページ。

⁵⁷ 小笠原英司 [2017] 「経営学とは何か—領域学か、ディシプリンか—」 『経営論集』 明治大学経営学研究所、64(4)、234ページ。

は、上田の企業家の立場、平井の主體的視点と同様であると思われる。

小笠原の記述から、経営学の本質的な部分は変化がほとんどないと思われる一方で、他方表層的な部分は時代の流れとともに、環境に対応するため変化、分化がなされてきた。多様な環境への対応は、その時々の部分最適化を誘発させる。部分最適化がゆえに、普遍化が困難であり多様な議論が乱立し錯綜する。「多様な要素を統一ないし統合するためには、統合の中核となる何かがある中心に位置しなければならない」というように本質を基盤においた統合化が必要である⁵⁸。

4 統合理論としての「栄養失調」

経営学は、大きく本質的な部分と表層的な部分とに分けることができる。本質的な部分は、表現の違いはあるにしても系譜から大きな違いはみられなかった。表層的な部分は、実践的な方法論であることが多く、環境とともに多様に変貌する。前者に対し、後者は多様な議論の錯綜が確認でき、経営学は以上を前提に考察する必要がある。

まず、経営学概念の本質的な部分を本稿で定義すると、目的達成のための統合的、創造的枠組み化ということができる。経営学として実践の学を加味すると、本質的な部分を基盤において、方法論的な具体性を持たせた議論が必要である。例えば、株式会社は利益追及、協同組合は組合員の生活向上が目的になる。前者、後者ともそれぞれの目的を達成させるために多様な方法を考え、実践していく。環境に応じて、方法は異なるため十人十色であることは容易に想定できる。同じ組織体でも時間軸を加味すると表層は多様に変化する。以上のように、本質と表層とは相互支援により、経営学は形作られている。

つぎに、本質的な部分である目的達成のための統合的、創造的枠組み化に対し、変化することが多い表層的な部分の具体的な変化事例をあげる。第一に日本における公害事件をあげる。ある組織が、金儲けのみを目的と

⁵⁸ 小笠原英司 [2017] 前掲論文、233ページ。

して自身に都合が良い方法を取り入れたとする。一時的には、利益が上がり組織は成長する。しかし、金儲けのみを目的とする方法のため「随伴的結果」が多様に生まれ、目的または方法を変更、修正せざるを得ない状況になる⁵⁹。目的や方法を恒久的に設定すると、業績が低下し、市場から淘汰される可能性が高まる。環境破壊が騒がれた高度経済成長期において、企業の社会的責任論が求められたことを考えると目的や方法の修正や変更が必要なことがわかる。つまり、時間軸で考察した場合、臨機応変に目的や手段を環境に応じて修正または変更することが必要である。

第二に、目的達成のための方法論的枠組みも時代によって変化する。大量生産による一単位あたりのコストカットによる低価格化は、今日消費者に受け入れられなくなっている。消費者の指向は、物理的な物としての商品から付加価値を加味した商品に移行しつつある。したがって、企業は利益追及のための大量生産から付加価値を加味した商品生産の方法論として枠組みを修正、または変更する必要性が迫られている。

また、概念としての経営学それ自体では抽象的で不完全であり「栄養失調」である⁶⁰。一般的に栄養失調とは、本来必要である栄養が足りていない異常状態という意味である。平常時を0にした場合、一般的な栄養失調はマイナスを意味する。しかし、経営学でいう「栄養失調」はプラスを意味する。経営学をそのまま全ての現実に適応しようとする行為は、無謀であり暴走である。環境に対して、経営学は絶対的に「栄養失調」であり、「栄養失調」がゆえに多様な要素を経営学の内部に取り込むというプラスが必要である。取り込むというプラス行為は環境を少しでも正確に認識するためにおこなわれる。環境とくに経営環境は、時間とともに複雑性が増大する不可逆性をもっている。経営学はその環境に果敢にも挑まなければ、経営学としての存在価値がなくなる。したがって、経営学の「栄養失調」は

⁵⁹ 三戸公 [2002] 『管理とは何か—テイラー、フォレット、バーナード、ドラッカーを超えて—』文真堂、193-205ページ。

⁶⁰ 抽象的なことが問題ではなく、抽象化のみで経営学を扱うことが不完全であり「栄養失調」である。

より多くの情報を取り込むという意味でプラスである。

具体的に Mintzberg の言葉を借りると、経営学はクラフトだけでは実践のみであり、アートだけではビジョンのみであり、サイエンスだけでは分析のみである。三つを統合して理解することが必要である。したがって「栄養失調」とは、現状に満足せず渴望的に常に主体認識の範囲を広げようとすることである。つまり、環境に対しアンテナを立てることである。例えば、経営学のサイエンスの部分に関して考察する。経営学として分析をする場合、Magretta がいうように数字と人間とから考察することができる。人間を分析する場合、周知のように経済学視点のみからの分析では不十分であり「栄養失調」である。経済学視点の他にも、心理学、社会学等の視点が必要である。要するに、人間を知ろうとする際、経営学それ自体は「栄養失調」であり他の学問からの借用を必要とする。アートとしての経営学、経験としての経営学も同様である。

そして、経営学における借用は、単純な借用と区別する必要がある。上記で上田は「複数の商業学」に秩序を持たせることが経営学の課題といい、小笠原は「統合の中核となる何かがある中心に位置しなければならない」といった。したがって、「栄養失調」である経営学は、無条件に他の学問から借用するのではなく秩序をもった借用が必須である。つまるところ秩序をもたせるには「統合の中核」が必要である。経営学として「統合の中核」になり得ることは、目的達成である。例えば、経営学の部分的側面であるサイエンスでは、経営学として分析をするという目的達成のため多様な学問からの秩序をもった借用をする。秩序たる所以は、経営学として分析の目的を達成しようとすることにある。

Koontz, H. (以下「Koontz」と略記)は、経営管理論に関して六つのグループに分けている。経営管理学派 (The Management Process School)、経験学派 (The Empirical School)、人間行動学派 (The Human Behavior School)、社会体系学派 (The Social System School)、意思決定理論学派 (The Decision Theory School)、数理学派 (The Mathematical School) である。各学派は、各学派内で部分最適を求め結論を出している。しかし、部分であるが故に不完全であり「栄養失調」である。Koontz はこれらの

学派に属する研究者に対し、対立し、小さな断片を取り上げ満足するのではなく統合 (synthesis) する必要があるという⁶¹。つまり、各学派は経営管理論として目的達成という秩序をもたせ、統合的、創造的枠組み化として扱う必要がある。

ゲーテンベルク, E. (以下「ゲーテンベルク」と略記) は、経営における経済的側面は技術的過程と密接に結びついているという⁶²。技術的過程は、経営科学 (betriebswissenschaft) の対象になり、労働科学 (arbeitswissenschaft) の原則としてあてはめることができ工学の部分が主となる。したがって、工学という部分的視点からの考察を意味する。他にも労働生理学 (arbeitsphysiologie)、経営心理学 (betriebspsychologie)、経営社会学 (betriebssoziologie) がある。これらは、境界線が不明確でありながらも経営経済学を含め区分される。しかし、各科学は単体では不完全であり「栄養失調」である。

以上の各科学は不明確ながらも境界線があり、限界が存在する。「かかる限界をのり超えることが許されるのは、個々の研究者が、その場合に必要な専門上の前提条件を明示することができる」と信じているときにだけにかぎられる」という⁶³。つまり、研究主体の認識の範囲に限定されつつも前提条件の明示により限界の超越が可能になる。ゲーテンベルクは以上に関して、大変困難であると述べている。しかし困難であるからこそ、統合理論として構築し秩序立たせて独自性を見出す必要がある。

さらに経営学としての秩序化は「統一化 (unifying)」を意味する。統一化は、バラバラな断片の寄せ集めではなくて、調整 (co-ordination)、密接に結び合い (closely knit)、順応し合い (adjusting)、連結し (linking)、

⁶¹ Koontz, H. (1964) *Toward a Unified Theory of Management*, McGraw- Hill, UK, USA, CANADA, pp.240-1. 〈鈴木英寿訳 [1971] 『経営の統一理論』ダイヤモンド社、321-2ページ。初版 [1968]〉

⁶² ゲーテンベルク, E. 池内信行監訳 [1977] 『ゲーデンベルク 経営経済学入門』初版 [1959]、千座書房、4ページ。

⁶³ ゲーテンベルク, E. 池内信行監訳 [1977] 前掲書、5ページ。

連動し (inter-locking)、関係し合っている (inter-relating) ことを指す⁶⁴。つまり、「栄養失調」だからといって闇雲に他の学問から借用するのではない。繰り返すように経営学として秩序をもたせ、上田がいうように経営学として単数で扱うことが可能になるかどうか重要になる。

上記のように経営学は「栄養失調」として、栄養を摂取する必要がある。栄養を摂取する過程で、経営学に合わない栄養、合う栄養がでてくる。その際にいかに経営学として秩序をもたせることができるかが、課題になる。「栄養失調」は英語表記で Malnutrition であり、語源をみると、栄養を与えること、育成過程という意味もある。筆者は、文字通りの栄養失調より栄養を与えること、育成過程の意を経営学にあてはめる必要がある。一般的な「栄養失調」の意味では自律していない、不完全、非科学的等がある。しかし、経営学としての「栄養失調」は秩序立った統合理論として、他の学問にはない複合的かつ構造的な特徴を有している。したがって、経営学は発展するために多様な栄養を摂取し、消化 (digestion)、吸収 (absorption) をする必要がある⁶⁵。

消化は、吸収する対象を吸収可能な状態にまで変化させることである。つまり、経営学が行う他分野からの借用はただ借りるのではなく、経営学という統合的、創造的枠組み化の内部に吸収可能な状態にまで変化させる。例えば、心理学アプローチを消化し、吸収すると、元の心理学アプローチではなく経営学アプローチに変化する。吸収は、あるフィルターを通して内部に取り入れることである。つまり、経営学という統合的、創造的枠組み化というフィルターをとおして、上記のように経営学化を行う⁶⁶。経営

⁶⁴ Follett, M. P. (1949) *Freedom & Co-ordination*, Management Publications Trust, UK, p. 61. (斎藤守生訳 [1970] 『フォレット経営管理の基礎—自由と調整—』ダイヤモンド社、121ページ。)

⁶⁵ 以下、『生物学辞典 第4版』岩波書店。を参考にし記述する。吸収は311ページ。消化は638ページ。消化酵素は638-9ページ。

⁶⁶ 経営学の統合的、創造的枠組みの内部で消化させるのか、外部で消化させ内部に取り入れるのかは、ここでは大きな問題ではない。問題は、経営学化ということが行われることである。

学化は平井のいう「経営を経営に即して経営的にみる認識体系」によってなされる。

消化、吸収をする際に消化酵素 (digestive enzyme) を欠かすことはできない。経営学の統合的、創造的枠組み化は、むやみやたらに多様な学問を借用するのではない。自身の枠組みに取り込み消化、吸収をして経営学化を行う。つまり、多様な学問に対する消化酵素がなければ消化、吸収ができない。したがって、多様な学問に対する消化酵素の保有が必要である。消化酵素は、主体の能力とともに学問自体の系譜研究によって培うことができ、経営学の目的達成のために使用される。

多様な学問に対する消化酵素の保有に関して、概念的には「必要多様性の法則 (The Law of Requisite Variety)」が有効である⁶⁷。端的にいうと、多様性だけが多様性を破壊 (destroy) することができる。換言すると、多様性は多様性によってのみ吸収される。具体的に経営学に当てはめて考えてみる。内部としての経営学の枠組みをR、外部としての多様な学問をDとする。RはむやみやたらにDから結果を得ることはできない。なぜならば、RはDに対し自身の消化酵素である多様性によってでしか制御することができないからである。

そして、経営学と他の学問との多様性の関係は、経営学とその研究主体との関係にも当てはめることができる。経営学は、その研究主体に対して圧倒的な多様性を有する。経営学を理解するためには、少しでも研究主体の多様性を引き上げる必要がある。具体的に研究主体の多様性を引き上げるには、経営学に関していうと「経営学の学」(経営学の学説研究)と「経営の学」(実践経営の理論・実証研究)とをリンクさせた系譜的研究をおこなうことが大きな方法であると思われる⁶⁸。歴史研究は、その学問そのものであり、多様性を引き上げる要因であるといえる⁶⁹。

⁶⁷ Ashby, W. R. (1958) "Requisite Variety and Its Implications for the Complex System" *Cybernetica* 1, pp. 83-99. または、Ashby, W. R. (1956), *An Introduction to Cybernetics*, John Wiley & Sons, USA pp. 206-13. (篠崎武 山崎英三 銀林浩訳 [1967] 『サイバネティクス入門』 宇野書店、255-63ページ。)

⁶⁸ 平田光弘 [2009] 前掲論文、86ページ。

繰り返すように、経営学は闇雲に他の学問、学派を統合し全てを利用しようとすることは不可能である。上記のように学問の限界と主体の限界と「必要多様性の法則」があるからである。つまり、経営学として統合し範囲を拡大しても、学問の限界と主体の認識範囲内に切り取って使用することになる。したがって経営学の発展を考えた場合、統合→切り取り→他のフレームワーク（framework）との衝突→理解→統合といったサイクルを繰り返し行うことが必要になる⁷⁰。

多様な学派の衝突は歓迎することであり、1) マネジメントを特殊な学問の領域として定義付け、2) 経営学を他の学問と統合、3) 経営学の多くの用語を明確化、4) 積極的に原則（fundamentals）を蒸留しテスト、により経営学は発展する可能性が高い⁷¹。つまるところ、最終的にはKoontzのいう六つのグループに基軸をおくことになる。しかし、質は異なる。目の前の溜まっている水を海と思い準備をして泳ぐのと、水たまりと思い安易に泳ぐのでは大いに異なる。経営学に求められることは、全体を意識し、部分の統合による全体化であり、単純な部分の全体化ではない。経営学という枠組み化のなかで多様な学問は秩序をもち、統合され経営学化され全体思考へ向かっていく。

5 おわりに

経営学は、科学と“科学”との双方の性格を持ち合わせている。科学視

⁶⁹ ゲーテ、J. W. V. 山野直司訳 [2017] 前掲書、104ページ参照。

⁷⁰ Popperは、科学者は自身の理論を不動のものにしようすることに警笛を鳴らしている。常にテストしなければ、誤ると述べている。Popper, K. R., Notturmo, M. A. (Ed.) (2005) *The Myth of The Framework- In defence of science and rationality*, Routledge, UK, USA, pp. 7-8. 〈ポパー哲学研究会訳 [2006] 『フレームワークの神話—科学と合理性の擁護—』 未来社、29-30ページ。初版 [1998]〉

⁷¹ Koontz, H. (1964) op. cit., pp.14-6. 〈鈴木英寿訳 [1971] 前掲書18-9ページ。〉注目するところは、統合の必要性を訴えるKoontz自身は、経営学は経営管理者にとって有意義な者でなければならないという経営管理学に属することである。

点から“科学”部分の批判は、部分的批判であり経営学の全体像を見失っている。科学視点からの批判は、経営学の科学部分を対象にしなければならない。しかし、科学と“科学”は双方を無視するのではなく、互いを認めて相互支援のなか、相互に発展をする必要がある。部分的視点ではなく全体的視点で経営学をみることが経営学の発展に寄与する。

まず日本経営学は、多様な影響を受けながらも独自の発展を遂げてきた。日本経営学は日本経営学でありドイツ経営学、アメリカ経営学にも該当しないし、訳すことは不可能と思われる。一般的にいわれる経営学は、一方ではドイツ経営学を意味し他方ではアメリカ経営学を意味するかもしれない。つまり、経営学という単語が意味する範囲は広すぎる可能性がある。したがって、本稿で述べてきたように日本経営学、ドイツ経営学、アメリカ経営学とも共通する本質的なことは、目的達成のため統合的、創造的枠組み化であり、表層はそれぞれの国の文化や風土によって多様に変化する。しかし、経営学という秩序の基という性格は同一である。多くの経営学者がいうように、根本的な定義付けが経営学に求められており、確認する必要がある。

つぎにMintzbergがいうように、経営学には「唯一最善の方法」はない。一つは、時間軸があるためであり、もう一つは目的それ自体と達成するための方法はそれぞれ異なる可能性があるからである。目的達成に向けた統合的、創造的枠組み化として考えた場合、主体によって方法は当然異なるし、時間軸によっても多分に異なる可能性を有する。因果関係のような形式に即した答えがない。しかし、以上が他の学問とは質を異にする経営学が有する素晴らしい特徴でもある。

また「栄養失調」は一見、ネガティブなイメージをもつかもしいない。しかし、繰り返すように、経営学の素晴らしい特徴を表現した言葉である。目的達成のために常に他から学ぶ姿勢を持ち合わせ、独自の統合的、創造的枠組み化内に消化、吸収し発展をしようとする。同じようにみえても「動的平衡」によって常に内部を変え秩序を保っている。秩序ある吸収、借用の蓄積が、現在の経営学を形成している。今後多様な学問から、借用、吸収をし、統合的、創造的枠組み化によって経営学として秩序立て、時間

軸を加味して発展をさせていく必要がある。

さいごに課題を述べる。経営学の系譜的本質をより正確に把握するためには、本稿で述べた内容では不十分である。本稿では、経営学の共通項を明らかにするため、導入期（上田）と経営学が構造的に述べられている新しい時期（小笠原）を比較した。したがって、変化の過程としての経営学が抜けている。詳細に系譜を知ろうとすると、特徴的な時代区分により各年代の経営学の特徴を経済事情と照らし合わせ明らかにしていく必要がある。以上が、本稿から生まれた課題であり、今後さらに詳細を詰めていく必要がある。

【参考文献】

- 池田清彦 [1992] 『分類という思想』 新潮社。
- 上田貞次郎 [1907] 「内池廉吉君書『商業学概論』を評す」『経済学商業学 国民経済雑誌』 2(6)、125-30ページ。
- 上田貞次郎 [1931] 『商工経営』 千倉書房。
- 上田正一 [1975] 「経営」『上田貞次郎全集 第一巻 経営経済学』 第三出版。上田正一は著作権者。編集委員代表は、猪谷善一、山中篤太郎、小田橋貞寿。
- 小笠原英司 [2017] 「経営学とは何か—領域学か、ディシプリンか—」『経営論集』 明治大学経営学研究所、64(4)、225-46ページ。
- ギデンズ, A. 松尾精文、成富正信、西岡八郎、藤井達也、小幡正敏、叶堂陸三、立松隆介、松川昭子、内田健訳 [1995] 『社会学（改訂新版）』 初版 [1992]、而立書房。
- ゲーテンベルク, E. 池内信行監訳 [1977] 『ゲーテンベルク 経営経済学入門』 千座書房。ゲーテ, J. W. V. 山野直司訳 [2017] 『色彩論』 筑摩書房。
- 酒井邦嘉 [2006] 『科学者という仕事』 中公新書。
- 坂本藤良 [1959] 『経営学史』 ダイヤモンド社。

- 桜井邦朋 [1991] 『大学教授 そのあまりに日本的な』 地人書館。
- 中條秀治 [2000] 『組織の概念』 文眞堂。
- 馬場誠 [1948] 「増地博士の経営学と我国産業の再建—『新しき経営学』の行き方—」 『増地庸治郎博士記念論文集 第1巻』 巖松堂書店。
- 平井泰太郎 [1965] 『経営学』 青林書院新社。
- 平井泰太郎 [1972] 『平井泰太郎経営学論集』 千倉書房。
- 平田光弘 [2009] 「平田光弘教授の略年譜、及び主要著作目録若かりし日々の回想」 星城大学『研究紀要』 (7)、72-86ページ。
- 増地庸治郎 [1939] 『経営学講話』 高陽書院。
- 増地庸治郎 [1939] 『経営要論』 巖松堂書店。
- 村上陽一郎 [1994] 『文明のなかの科学』 青土社。
- 三戸公 [2013] 「日本における経営学の貢献と反省—21世紀を見据えて—」 経営学史学会編『経営学の貢献と反省—二十一世紀を見据えて—』 文眞堂。
- 三戸公 [2002] 『管理とは何か—テイラー、フォレット、バーナード、ドラッカーを超えて—』 文眞堂。
- 福岡伸一 [2012] 『動的平衡2』、[2014] 『動的平衡ダイアログ』、[2017] 『動的平衡3』 木楽社。
- 吉田和夫 [1992] 『日本の経営学』 同文館。
- 『生物学辞典 第4版』 岩波書店。

Ashby, W. R. (1958) "Requisite Variety and Its Implications for the Complex System" *Cybernetica* 1. または、Ashby, W. R. (1956), *An Introduction to Cybernetics*, John Wiley & Sons, USA. (篠崎武 山崎英三 銀林浩訳 [1967] 『サイバネティクス入門』 宇野書店。)

Barnard, C. I. (1938) *The Functions of the Executive* Thirtieth Anniversary Edition, Harvard University Press, USA. (山本安次郎、田杉競、飯野春樹訳[2013] 『新訳 経営者の役割』 ダイヤモンド社。)

Follett, M. P. (1949) *Freedom & Co-ordination*, Management Publications Trust, UK. (斎藤守生訳 [1970] 『フォレット経営管理の基礎—自由

と調整—』ダイヤモンド社。〉

- Hernes, T. (2008) *Understanding organization as process: theory for a tangle world*, Routledge, USA, CANADA.
- Koontz, H. (1964) *Toward a Unified Theory of Management*, McGraw-Hill, UK, USA, CANADA. 〈鈴木英寿訳 [1971] 『経営の統一理論』ダイヤモンド社。〉
- Kuhn, T.S. (1996) *The Structure of Scientific Revolutions 3rd ed*, University Press, USA. 〈中山茂 [1980] 『科学革命の構造』みすず書房。〉
- Lakatos, I., Worrall, J. and Currie, G. (Eds.) (2001) *The Methodology of Scientific Research Programmes*, Cambridge University Press, UK. 〈村上陽一郎、井山弘幸、小林傳司、横山輝雄 [1986] 『方法の擁護—科学的研究プログラムの方法論』新曜社。〉
- Magretta, J. (2013) *What Management Is: how it works and why it's everyone's business*, Profile Books, Great Britain. 〈山内あゆ子訳 [2003] 『なぜマネジメントなのか—全組織人に必要な「マネジメント力」—』ソフトバンクパブリッシング株式会社。〉
- McFarland, D. (1986) *The Managerial Imperative: The Age of Macromanagement*, Ballinger Pub Co, USA.
- Mintzberg, H. (2013) *Simply Managing: What Managers Do and Can Do Better*, Berrett-Koehler Publishers, USA. 〈池村千秋訳 [2014] 『エッセンシャル版 ミンツバーグ マネージャー論』日経BP社。〉
- Popper, K. R. (2005) *Realism and the Aim of Science*, Routledge, UK, USA. 〈小河原誠、蔭山泰之、篠崎研二訳 [2002] 『实在論と科学の目的 (上)』岩波書店。〉
- Popper, K. R., Notturmo, M. A. (Ed.) (2005) *The Myth of The Framework—In defence of science and rationality*, Routledge, UK, USA. 〈ポパー哲学研究会訳[2006]『フレームワークの神話—科学と合理性の擁護—』未来社。〉
- Simon, H. A. (1997) *Administrative Behavior: A Study of Decision Making*

Processes in Administrative Organizations, The Free Press, USA.〈二村敏子、桑田耕太郎、高尾義明、西脇暢子、高柳美香訳 [2009]『新版 経営行動—経営組織における意思決定過程の研究—』ダイヤモンド社。〉